

道徳的直感・共感性・道徳的アイデンティティが逸脱行動の判断に及ぼす影響

The effects of moral intuition, empathy and moral identity on the judgment of the wrongdoings

高井弘弥* 寺井朋子*

TAKAI, Hiromi* TERAJ, Tomoko*

Since Haidt's paper on moral judgment was published in 2001, studies of the development of morality have changed focus from Kohlbergian perspective to Haidt's moral intuition theory. The 'Trolley problem' is a symbolic moral dilemma, which reveals that moral judgments are mainly made on the basis of moral intuition, not on rational, cognitive thought. In this study, we made a moral dilemma of this kind, the moral intuition vs. utilitarian judgment, using everyday occurrences. And as a dependent variable, we used a slightly morally wrongdoing. We studied how the three independent variables, the moral intuition, empathy and the moral identity, affect this dependent variable. The results are as follows:

- 1) If you can imagine victims of the wrongdoings easily, then empathy is a more effective inhibitor.
- 2) If you can't, then the moral intuition is more effective.
- 3) Moral identity plays important role in both wrongdoings.

道徳の教科化に伴って、子どもたちに活発な議論を引き起こすための材料として、「道徳的ジレンマ」が注目されている（荒木,2012¹など）。これまで道徳発達の理論を代表するジレンマとしては、Piagetの認知発達理論を道徳発達の分野に拡大した Kohlbergの「ハイイツのジレンマ」（Kohlberg,1969²,1980³）があげられる。周知のように、「ハイイツのジレンマ」で重視されるのは、ハイイツが妻を救うために盗みをするのかしないのかという判断の結果ではなく判断を導く理由付けであり、それによって道徳判断の発達段階が考えられた。

それに対して、Haidt(2001)⁴は、道徳判断が自動的な認知プロセスによる直感によって行われると主張した。そこでは、Kohlbergが重視した道徳判断の理由付けは、道徳的直感(Moral Intuition)によってなされた判断を正当化するために意識的に推論された、いわば「後知恵」(hindsight)であると論じられた（高井,2010⁵; 寺井,2009⁶）。このような道徳的直感を代表するジレンマが「路面電車課題」(Trolley Problem)である。路面電車課題では、5人の生命を救うために1人の生命を犠牲にすることが許されるかどうかという判断が求められる。つ

まり、「多数の幸福のために少数を犠牲にすることは許されるか」という問いに対して、「合理的に考えて許されることである」という「功利主義的判断」と、「合理的に考えれば許されることだとは思いますが、感覚的に抵抗がある」という「直感的判断」の対立を鮮明に示すジレンマである。その際の条件についてはさまざまなものが考案されている(Cushman,2006⁷)が、いずれにせよこのジレンマでは判断を下した理由については重視されない。それどころか、判断と理由付けとの整合性が見られないことこそが人間の道徳判断の特徴であることが示されている。つまり、道徳判断の根底にあるものは道徳的直感であり、この直感に導かれて判断を下し、そのあとでその判断を正当化する理由付けを考えるとされているのである。

このジレンマはすぐれた「思考実験」のツールであり、多くの刺激的な論争が繰り広げられ(Catcart,2013⁸; Edmonds,2013⁹; サンデル,2010¹⁰)、これまでの心理学や社会学、さらには経済学の基本的な人間観である「合理的人間」(Yamagishi et al., 2014¹¹)の前提を疑うための、非常に有力な例題として様々な場面で取り上げられるようになってきた。また、今後自動車の自動運転など

* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women's University)

に実装される可能性がある AI がこのようなジレンマをどう解決すべきかなどの工学的・法学的な課題にもなっている(Bonnefon et.al, 2016¹²)。

しかし、路面電車課題はそのきわめて非日常的な設定ゆえに、日常的になされる道徳判断、そして実際の道徳的行動とどのような関連にあるのかを検討するのは非常に難しい。Navarrete et al. (2012)¹³ は、コンピュータ上でのシミュレーションによる仮想現実空間で路面電車課題を被験者に提示することで、より実際の場面での被験者の反応を測定しようと試みた。しかしながら、いくら知覚的・感覚的に逼真に迫るような場面設定をしても、ここでの反応が現実の反応と一致している保証はない。

さて、Kohlberg の道徳発達理論に対しては感情的な要素を軽視しているとの批判が向けられた。そのような感情の部分の補完するものとして、Hoffman は他者の苦痛を感じ取る能力、すなわち共感が道徳発達を進める重要な推進力となることを主張した (Hoffman,1981¹⁴)。ここでの共感とは自己中心的な認知発達段階から次の段階へと移行するのを手助けする役割であり、最終的には内的で普遍的な道徳規範に従う人間になるという Kohlberg の道徳発達理論の枠内にとどまっている。Hoffman たちは、道徳性の発達にとって重要なことは、このような共感が発達したものであることとしての役割取得能力であると考えた。本間・内山(2013)¹⁵ は、この役割取得能力の研究をレビューし、Hoffman の理論に依拠した Davis(1983)¹⁶ の多次元共感尺度や役割取得能力の個人的発達段階に注目した Selman(1976)¹⁷ も、共感の認知的側面としての役割取得能力を重視していることを示した。このような役割取得能力としての共感と道徳性との関連については、日常的な道徳性を測定する the Visions of Morality Scales (VMS) と、Davis(1980)¹⁸ の Interpersonal Reactivity Index を用いて検討し、高い相関を見いだした Shelton & McAdams (1990)¹⁹ の研究などがある。では、このような共感と、Haidt らが重視する道徳的直感とはどのような関連があるのだろうか。路面電車課題を例とすると、5 人の生命を救うために一人の人間を犠牲にするという「功利主義的判断」をためらうことが道徳的直感であるとする、他者の立場に立って考えることができる共感とは、道徳的行動を導くものとして同じなのだろうか、それとも異なるものなのだろうか。

Kohlberg の道徳発達理論に対するもう一つの批判は、道徳判断と道徳的行動との間の溝 Moral Judgment-Action Gap (Walker,2004²⁰)を埋めていないということである。この問題に取り組むために用いられるようになった概念の 1 つが、道徳的アイデンティティ(moral identity)である (Aquino & Reed,2002²¹)。Hardy et al.(2014)²² では、この道徳的アイデンティティとは道徳

的な理想自己であり、「単に道徳的に正しいかどうかを知ること以上に、実際に正しいことをすることが自分のアイデンティティにとって重要であると考えたときに、そのような正しいことをする」と述べている。つまり、人は、道徳的に正しいと判断した行為をそれだけで実行するのではなく、そうすることが自分にとって重要かどうかというアイデンティティの一部としてとらえられたときに実行する、ということである。Aquino & Reed (2002) では、公正・寛大・正直などの 9 つの特性について、そういった特性を持つことが自分にとって重要かどうかを 10 段階で評価させた。質問文は、「その特性を持った人間になれば、自分にとってうれしく感じるだろう」といった個人的な重要性を反映させる「内面化」と、「そのような特性を自分が持っていることが他人に伝わるような活動に積極的に参加する」といった他人へ伝えることの重要性を反映させる「シンボル化」の二つの下位群に分けられていた。Reed & Aquino (2003)²³ では、このうち「内面化」の方が道徳的態度や道徳的行動を予測するものであることを示している。

以上をふまえて、本研究の目的は、

(1) 道徳的直感、情動的共感および道徳的アイデンティティが日常場面における逸脱行動への判断に及ぼす影響を検討する

(2) その影響が逸脱行動の種類(被害が特定の個人か不特定の多数か)によって異なるかどうかを検討するの 2 点である。

また、本研究では、軽微な逸脱行動に対する判断を上げる。ここで取り上げるような軽微な逸脱行動は、重篤な違反行動のように明確なルールや規範によって禁じられているものではないため、そのような違反行動をしないことを選択する場合には、被験者の道徳性がより強く影響すると考えられる。このような軽微な逸脱行動に対する判断を下す要因としては、直感的な判断なのか、それとも普段から自分は道徳的にこうあるべきだと考えている道徳的アイデンティティなのか、あるいはその両方が影響を及ぼしているのだろうか。別な観点から考えると、逸脱行動をすることを妨げているのは、比較的自動的な反応傾向であると考えられる道徳的直感なのか、それともこれまでの育ちの中で培ってきた、そしてその中で自分が選び取ってきた、いわば意志的なものと考えられる道徳的アイデンティティなのか、という問題でもある。

本研究ではまた、日常場面に近づくことを重視するために、道徳的直感の測定についても新たに作成することとする。路面電車課題の本質は、功利主義的判断とそれに反対する非功利主義的判断(道徳的直感)との対立であるため、本研究でも、このような功利主義対非功利主義(道徳的直感)が対立する場面をジレンマとして設

定する。

予備調査

本研究で作成した3つのジレンマが功利主義対非功利主義（道徳的直感）の設定であるのかを確認するために、本研究で作成したジレンマが路面電車課題とどのような関係にあるのかを調べる。

方法

手続き 関西にある女子大学の心理学関連の授業中に調査票を配布した。調査は無記名で実施した。

倫理的配慮 調査に参加したくない場合は、白紙で提出しても構わないこと、また答えたくない項目があれば空欄にしておいて構わないことを伝えた。また、調査に参加しない場合でも授業の成績等には一切影響しないことを説明した。

対象者 女子大学生 89 名に調査を依頼した。白紙で提出した 3 名を除いた 86 名を分析対象とした。質問紙は高井(2010)で用いられた路面電車課題 2 問と今回新たに作成した直感的道徳判断課題の 3 問であった。

調査項目の構成

高井(2010)で用いた路面電車課題 Hauser et al. (2007)²⁴の路面電車課題を日本人の成人を対象にして追試した高井(2010)よりフランク・デニス課題、トミー・クリス課題を用いた。フランク・デニス課題は、路面電車課題と同様であり、フランク課題は陸橋の上から太った男を突き落とし 5 人の命を助けるという内容であり、デニス課題は気を失った運転手に替わり 5 人の人が線路上にいる方向から 1 人の方向へ列車を切り替えるという内容である。また、トミー・クリス課題のうち、トミー課題は新車の 20 万円の特注革張りのシートを血で汚したくないため重傷のけが人を助けられない内容であり、クリス課題は手元に 20 万円あるにもかかわらず世界の貧しい子どもの治療費を寄付しなかった内容であった。フランク、デニス、トミー、クリスのそれぞれについて、「あなたはこの人がしたことについてどう思いますか」と尋ね、「とても反対(1)」「とても賛成(6)」の 6 件法で回答を依頼した。フランク課題・トミー課題のほうが、デニス課題・クリス課題よりも道徳的直感が強く働き、得点が低くなることが明らかとなっている。

日常的道徳的直感の項目 今回の研究のために新たに作成された項目で、比較的日常的に出会うと考えられる場面での判断について回答するものである。以下の 3 項目について、それぞれ道徳的直感に反して合理的な判断をする人間に対して、「あなたはこの人の意見についてどう思いますか？」と尋ね、とても反対(1)～とても賛成(6)までの 6 件法での回答を依頼した。

1. 野良犬課題 とても急で高い崖の上に一匹の野良犬が、迷い込んで降りられなくなってしまいました。たくさんの人が集まってきて、その野良犬を助けるために、クレーン車をよんできたり、網を用意したりしていました。それを見て、ある人が、「たくさん野良犬が保健所では毎日のように殺されている。たった一匹の野良犬を助けるために、こんなに手間やお金をかけるのは無駄なことだから、やめた方がいい」と言いました。

2. 募金課題 駅前で、心臓に重い病気を持っていて、アメリカに行かなければ移植治療ができないという赤ちゃんの治療費と渡航費用約一千万円を集めるために、多くの方が募金活動に協力していました。それを見て、ある人が、「アフリカでは貧しさや病気で多くの赤ちゃんが毎日のように死んでいる。この募金のお金があれば、何万人という赤ちゃんが助かることになるから、一人の赤ちゃんを救うお金があったら、そのお金をアフリカに送った方がいい」と言いました。

3. カモ課題 公園の池に、首に矢が刺さったままのカモが泳いでいました。たくさん人が集まってきて、そのカモの矢を抜いてやろうとして、カモを捕まえるために大変苦労していました。それを見て、ある人が、「たくさんカモが食べられるために矢で射て殺されている。どうしてこの一匹のカモを助けるために、みんな苦労しているのか。無駄なことだから、やめた方がいい」と言いました。

それぞれ得点を逆転することで、功利主義的な判断には反対し道徳的直感を優先する程度を示していると考えられる。

結果と考察

フランク課題とトミー課題への回答の合計点と、デニス課題とクリス課題の合計点と、日常的道徳的直感得点（野良犬・募金・カモの合計点）について相関関係を調べた。その結果、より道徳的直感が強く働くフランク・トミー課題と日常的道徳的直感得点の間に正の相関関係がみられた ($r = .319, p < .01$)。

以上のことから、今回作成された道徳的直感の課題は日常的な行為に対する判断を求める内容ではあるものの、路面列車問題などの非日常的な道徳的直感と同種のジレンマであるとみなした。

本調査

日常場面における軽微な逸脱行動への判断に対して、道徳的直感、共感性、道徳的アイデンティティがどのように影響を及ぼしているのかについて、検討する。

方法

手続き 関西にある 2 つの大学の心理学関連の授業中に調査票を配布した。調査は無記名で実施した。

倫理的配慮 予備調査と同様に、調査用紙を配布した際、無記名であり、結果は数値的にのみ処理されること、調査に参加したくない人は白紙のまま提出してよいこと、答えたくない項目は空欄のままよいことを説明した。また、調査に参加しなくても授業の成績評価には一切影響しないことを説明し、回答をもって同意したとみなした。

対象者 大学生 353 名 (男性 63 名, 女性 290 名) に回答を依頼した。平均年齢 19.51 歳 ($SD=1.23$, range18-36) であった。その中から選択式の回答に 1 つでも空欄や欠損値があった回答者を分析から削除したため、有効回答数は 237 名 (男性 50 名, 女性 187 名) となった (平均年齢 19.60 歳 ($SD=0.91$, range18-26)。

調査項目の構成

道徳的直感 予備調査で用いた「野良犬」「募金」「カモ」の 3 項目を用いた。予備調査と同じく、「あなたはこの人の意見についてどう思いますか?」と尋ね、「とても反対(1) - 「とても賛成(6)」までの 6 件法での回答を逆転して合計した数値を道徳的直感の得点とした。したがって、この得点が高いほど、功利主義的な判断には賛成しない、ということになる。

逸脱行動への善悪判断 「かげで友達の悪口をいうこと」などのルールが明確ではない逸脱行動について既存の項目 (寺井, 2009²⁵) を参考にして作成した。すべて「とても悪い(5) - 「まったく悪くない(1)」の 5 件法で尋ねた。

道徳的アイデンティティ Aquino & Reed(2002)から、責任感、親しみやすさ、公平、勤勉、寛容の 5 つ道徳的特性(Moral Traits)を選択した。それぞれの道徳的特性につき、「自分にとって『公平』という特性を持つことは嬉しいことだ」「自分にとって『公平』という特性を持つことは重要だ」「『公平』という特性は自分の一部分だ」の程度を「まったくそう思わない(1) - 「とてもそう思う(6)」の 6 件法で尋ねた。

情動的共感性尺度 加藤・高木(1980)²⁶ が日本人用に作成した情動的共感性尺度の項目を用いた。「私は映画を見るとき、つい熱中してしまう」などの感情的温かさ尺度 10 項目と、「私は人がうれしくて泣くのをみると、しらけた気持ちになる」などの感情的冷たさ尺度 10 項目。すべて、「まったく違うと思う(1) - 「まったくそうだと思う(7)」の 7 件法で尋ねた。

結果と考察

道徳的直感と情動的共感性との関係 道徳的直感の感情的特徴を明確にするために、共分散構造分析 (最尤法) により分析を行った(Figure1)。すべてのパスが有意で、モデル全体の適合度は、 $GFI=.994$, $CFI=1.000$, $RMSEA=.000$, $AIC=25.946$ と、十分な値であった。

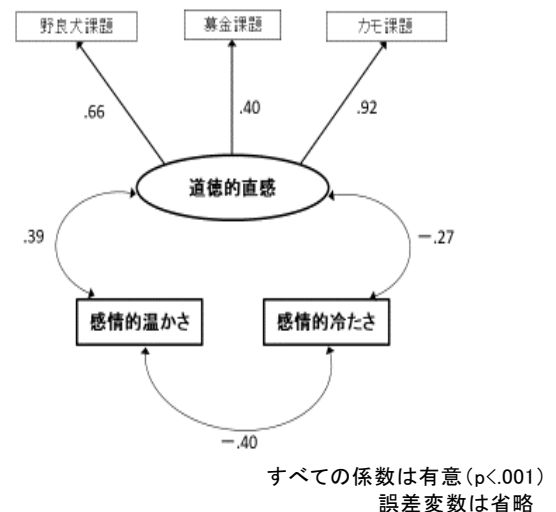


Figure1 道徳的直感と情動的共感性の関係

直感的道徳的判断は、情動的共感性の感情的な温かさとは正の相関関係($r=.39$)、感情的冷たさとは負の相関関係($r=-.27$)がみられた。これ以降は、感情的な温かさを情動的共感性として扱い、分析していくこととした。逸脱行動の因子分析 日常的な逸脱行動に対する善悪判断の構造について、主因子法による因子分析を行った。固有値の変化から 2 因子構造が妥当であると考えたため、2 因子と仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。また、負荷量が 0.5 以下の場合に 2 因子間の負荷量の差が小さくなっていったため、負荷量 0.5 以下であった 7 項目は使用しなかった(Table 1)。被害者と加害者の関係に注目して、第 1 因子は誰に対する逸脱行動であるのかがはっきりしており被害が明確であるので、「明確な被害のある逸脱行動」因子と命名し、Table 1 の太字の項目(項目番号 11,12,13,10,14,15)の合計点を用いた。第 2 因子は、被害が漠然としていて不明確なため、「明確な被害のない逸脱行動」因子と命名し、Table 1 の太字の項目 (項目番号 2,3,1,6) の合計点を用いた。逸脱行動に影響する要因の検討 重回帰分析を行って、逸脱行動について、道徳的直感と道徳的アイデンティティからの影響を検討した。

道徳的アイデンティティは、責任感、親しみやすさ、公平、勤勉、寛容それぞれについて、「持つと嬉しい」、「私にとって重要である」、「私の重要な一部分である」の 3 項目を合計した得点を用いて、主因子法で因子分析を行い、一因子であることを確認した。そして、その因子得点を「道徳的アイデンティティ得点」とした。

道徳的直感は、野良犬課題、募金課題、カモ課題の判断得点を、主因子法で因子分析を行い、一因子であることを確認し、その因子得点を「道徳的直感得点」とした。

情動的共感性に関しては、感情面を重視した情動的共感性尺度の感情的温かさ尺度のみを用いた。

そして、明確な被害がある逸脱行動と明確な被害のな

Table 1
 日常的な非道徳的行動に対する善悪判断の因子構造(主因子法, プロマックス, N=237)

Table 1

項目	因子1	因子2
明確な被害がある逸脱行動($\alpha = .835$)		
11. 車椅子や松葉杖の人が一人で扉を開けにくそうにしているも、ほおっておくこと	.799	-.093
12. 前を歩いている人がつまずいて転んでも、無視して横を通り過ぎること	.748	-.031
13. みんなが冷たくしていると聞いた人に対して、自分も同じように冷たくすること	.702	-.033
10. 袋が破れて目の前で困っている人がいても、ほおっておくこと	.634	-.069
14. 本当かどうか分からない友達のうわさ話をすぐに別の友達に話すこと	.619	.044
15. かげで友達の悪口を言うこと	.571	-.040
17. 友達から打ち明けられた悩みごとを、こっそり他の友達に教えること	.401	.223
16. お葬式の場所で、笑いながら話をする事	.337	.145
9. 先生にあだ名で呼びかけること	.209	.117
明確な被害のない逸脱行動($\alpha = .734$)		
2. 人の邪魔になるところに荷物を置くこと	-.044	.789
3. 図書室で借りた本を返さずに持つておくこと	-.120	.579
1. 学校や駅でみんなを使う傘を借りたが返さないこと	-.067	.567
6. 道路や階段などのみんなが使う場所で地面に座ること	.012	.517
4. ひじをテーブルにのせながらご飯を食べること	.025	.466
5. 口に食べ物が入っているままで立ち歩くこと	.116	.413
7. 校長先生に話しかけられたとき、「はい」と言わずに「うん」と返事をする事	.267	.385
8. 初めて会った友達のお父さんやお母さんに、友達に話しかけるような言葉で話すこと	.237	.316
	因子間相関	-.335
		累積寄与率33.159%

Table 2 明確な被害がある逸脱行動に及ぼす情動的共感・道徳的アイデンティティ・道徳的直感の影響

	非標準化係数		標準化係数		有意確率
	B	標準誤差	ベータ	t 値	
(定数)	19.68	2.173		9.054	.00
情動的共感	-.140	.042	-.222	-3.305	.00
道徳的アイデンティティ	-1.133	.306	-.241	-3.701	.00
道徳的直感	-.045	.293	-.010	-.156	.88

a. 従属変数 特定個人への逸脱

Table 3 明確な被害のない逸脱行動に及ぼす情動的共感・道徳的アイデンティティ・道徳的直感の影響

	非標準化係数		標準化係数		有意確率
	B	標準誤差	ベータ	t 値	
(定数)	6.066	1.219		4.975	.00
情動的共感	.027	.024	.079	1.127	.26
道徳的アイデンティティ	-.606	0.171	-.238	-3.527	.00
道徳的直感	-.350	.165	-.145	-2.131	.03

い逸脱行動を目的変数として、道徳的アイデンティティ、道徳的直感、情動的共感の3つを説明変数として、強制投入法による重回帰分析を行った。

その結果、明確な被害がある逸脱行動に関しては、情動的共感性や道徳的アイデンティティは逸脱行動を抑制していたが、道徳的直感からの影響はみられなかった (Table 2)。つまり、明確な被害のある逸脱行動を抑制する要因としては、情動的共感性や道徳的アイデンティティは有効であるが、道徳的直感はあまり有効ではないことが、重回帰分析の結果から明らかになった。

一方、明確な被害のない逸脱行動に関しては、明確な被害がある逸脱行動とは異なり、情動的共感性からの影響は見られず、道徳的直感からの影響がみられた (Table 3)。道徳的アイデンティティからの影響は、明確な被害のある逸脱行動の場合と同様に、逸脱行動を抑制する方向に働いていた。したがって、明確な被害のない逸脱行動を抑制する要因としては、情動的共感性ではなく、道徳的直感や道徳的アイデンティティの方が有効であることがわかった。

総合考察

本研究では、まず、非日常的な路面電車課題とは異なる日常的なジレンマ状況を作成し、道徳的直感について検討した。その中で、ルールが明確でない逸脱行動について、被害者が目の前に存在している「明確な被害がある逸脱行動」と、被害者が不特定で今は目の前にはいない「明確な被害のない逸脱行動」に分けることができた。

「明確な被害がある逸脱行動」には「温かさ」という情動的共感性が抑制的に働いていること、「明確な被害のない逸脱行動」には道徳的直感が抑制的に働いていることが明らかになった。また、どちらの逸脱行動に対しても、道徳的アイデンティティが抑制的に働くことも明らかとなった。情動的共感性と道徳的直感については、比較的強い関連が見られた。このどちらもが、合理的・功利的な判断とは異なる、情動的な反応傾向であると考え、この結果は当然であろう。しかし、逸脱行動との関連で見ると、この情動的共感性と道徳的直感には異なる側面があることが推測できる。情動的共感は、被害者の苦痛が容易に感じ取れるような、明確な被害がある逸脱行動に対して、より抑制的に働く。それに対して道徳的直感には、被害者の苦痛を直接感じ取りにくく、明確な被害のない逸脱行動の場合に、抑制的に働くということが考えられる。つまり、被害者の苦痛は直接には感じ取れない逸脱行動が「何となく」悪いものだと感じさせる効果が、道徳的直感にはあると考えられる。

Greene et al. (2001)²⁷らは、路面電車課題について検討した中で、太った男を突き落とすなどの直接自分が手

を下して犠牲者を出す Moral-Personal 課題と、ポイントを切り替えることにより間接的に犠牲者を出す Moral-Impersonal 課題を設定して、前者の方が後者よりも情動的負荷が強く、道徳的直感に反した判断を下すには抵抗が強いことを論じている。すなわち、犠牲者の苦痛を直接引き起こす場合の方が、間接的に引き起こす場合よりも、道徳的直感が判断に大きな影響を及ぼすということである。これは、一見すると本研究での主張と齟齬するかのようである。しかし、Greene et al. (2001)が道徳的直感としているものは、合理的・功利的な判断とは異なる情動的で非合理的な判断のことであり、上に述べたように、本研究で扱う共感と道徳的直感の両方を含んでいるものである。したがって、本研究の結果から主張することは、Greene et al. (2001)らをはじめ多くの論者が取り上げている「道徳的直感」とは、より情動的で他者の苦痛に反応しやすい傾向である「情動的共感」と、直接的な他者の苦痛は見えず、また明示的なルールもわかりにくい行動に対する判断を支える「道徳的直感」の二つに分けられるのではないかということである。本研究では、このような「情動的共感」とは異なる「道徳的直感」の存在について示唆することができたが、その詳細な内容や機能について明らかにすることは、今後の課題として提言しておく。

次に、逸脱行動と道徳的アイデンティティについては、本研究の結果では、日常的な逸脱行動に対して、道徳的アイデンティティが抑制的に働いていることが示された。その効果の大きさは、被害が明確かどうかに関わらず、同じ程度であった。道徳的アイデンティティの測度として本研究が依拠した Aquino & Reed (2002)では、自己にとってこの道徳的アイデンティティが重要であることと道徳的行動との関連を示している。本研究でも、逸脱行動を抑制する1つの要因として、この道徳的アイデンティティがあることが明らかになったが、このような道徳的アイデンティティはどのように形成されるのだろうか。Atkins et al. (2004)²⁸は、道徳的アイデンティティを構成するものは、道徳的判断、自己理解、社会的機会の3つであり、それらはパーソナリティと安定した社会的影響に根ざしたものであると述べている。Aquino et al. (2011)²⁹は、道徳的アイデンティティが自己にとって重要であればあるほど、極端な自己犠牲などの並外れた善 (Uncommon goodness) を実行している話を聞かされるとさらに道徳的に高揚されていくことを示した。つまり、道徳的アイデンティティは高ければ高いほど、さらに高められていく、ということになる。これらのことを考慮すると、生得的な傾向と家庭・文化的環境によって形成された道徳的アイデンティティは、よい道徳的モデルに出会うことでさらに確立されていくということである。本研究で扱った青年期では、すでにある程度の道徳的ア

アイデンティティは確立している。したがって、ここで示されたような道徳的行動に重要な影響を及ぼすと考えられる道徳的アイデンティティの獲得過程を検討することは、今後の道徳教育の重要な課題である。

しかしながら、Lapsley & Stey (2014)³⁰が述べているように、道徳的アイデンティティそのものを教育の目的とするような明確なプランはまだ作られていない。これは、道徳的アイデンティティの研究が成人を対象に行われており、発達的な観点からの研究が少ないことが理由の一つである。そこで、Lapsley & Stey(2014)が注目しているのは、Kochanska (Kochanska,2002³¹; Kochanska et al., 2010³²)らの一連の良心の発達についての研究である。特に、Kochanska et al. (2010)の縦断研究では、25ヶ月の乳児期からの良心の発達を検討していて、道徳的アイデンティティの一つの側面を考える上で非常に重要である。もう一つ、道徳的アイデンティティの教育にとって重要なことは、道徳的模範者(moral exemplars)や道徳的コミュニティに所属することの影響(Colby & Damon,1992³³; Hart,2005³⁴ など)の検討である。道徳的模範者に接することや道徳的コミュニティで向社会的体験をすることが、その後の道徳的アイデンティティの形成に重要であることは容易に推測できるが、Lapsley & Stay(2014)が指摘しているように、このようなエピソード的記憶がどのようにして自伝的記憶へと変換されるかを検討することが、今後の道徳教育にとって必須の課題であろう。Lapsley & Narvaez (2004)³⁵は、その過程での親の影響について論じているが、友人関係やメディアなど様々な要因の影響についてはまだ論じられていない。

道徳的直感について本研究が示したのは、道徳的直感と功利主義的判断が対立するジレンマにおいて、道徳的直感に従って判断をする傾向が、被害者が特定されず被害が明確でない逸脱行動の抑制と関連しているということである。軽微な逸脱行動には、それを禁ずる明確なルールがないため抑制には道徳的直感が何らかの役割を果たしているのではないかと、ということが本研究から示唆される。ただ、このようなジレンマ課題で、功利主義的判断をすることが逸脱行動を抑制しないことになるのかどうかについては慎重に判断する必要があるだろう。たとえば、政策決定者のような立場にある場合は、道徳的直感に引きずられずに、功利主義的判断をする必要もあるだろう。Côté et al. (2012)³⁶では、上層階級の被験者は、下層階級の被験者と比べて功利主義的な判断をする傾向があることを示されているが、これも単に「お金持ちは冷たい」などといったステレオタイプの偏見から説明されるべきものではなく、上層階級の社会文化的立場から検討すべきものであろう。本研究では、功利主義的判断がどのような立場からなされているのかなどにつ

いての検討は行っていない。しかし、マクロに見ていくとさまざまな社会文化的階層からの功利主義的判断がありうるだろう。また、Koenigs et al. (2007)³⁷や Mendez et al. (2005)³⁸の研究に見られるような、前頭前野損傷患者らが功利主義的判断の方を好むといった結果もあり、功利主義的判断の背景にあるものを検討する試みは、今後さまざまなアプローチからなされるべきである。

一方、道徳教育の観点からは、道徳的直感を生かしていくのは、非現実なジレンマ場面での判断や明らかにルール違反であることがわかるような場面ではなく、むしろ日常的なルールが明確でない逸脱場面をとりあげることが重要であろう。では、道徳的直感の教育についてはどのように考えればいいのだろうか。Sauer(2012)³⁹が指摘するように、道徳的直感の教育とは習慣化のプロセスである。そして、道徳的直感に変化する例として、Rudman et al. (2001)⁴⁰の研究を取り上げている。それによれば、繰り返し好ましい刺激を提示することが、潜在的な人種の偏見・ステレオタイプに劇的に影響を及ぼすことが示されている。さらに、道徳的直感が被験者の社会経済的地位によって異なるという Levy(2007)⁴¹の研究から、自動的な道徳判断のプロセスが変化する可能性について論じている。これらから示唆されるのは、顕在的な道徳的ルール教育ではなく、潜在的な道徳的態度・行動の教育の有効性であろう。この点は、道徳的アイデンティティの教育についても同様である。以上見てきたように、本研究が示唆する道徳的直感と道徳的アイデンティティの重要性を考慮すると、学校などで顕在的に教えられる道徳教育では扱いきれない、潜在的な直感とその定着過程を検討し、その応用を提言していくことが今後の道徳発達研究の課題であろう。

— 注 —

- (1) 荒木 紀幸 (監修), 道徳性発達研究会 (編集). 『モラルジレンマ教材とする白熱討論の道徳授業=小学校編』 明治図書出版, 2012.
- (2) Kohlberg, L., Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. Goslin, *Handbook of socialization theory and research*. New York: Academic Press. 1969. pp. 151-235.
- (3) Kohlberg, L., Educating for a just society: Updated and revised paradigm. In B. Munsey, *Moral development, moral education, and Kohlberg*. Birmingham, AL: Religious Education Press. 1980. pp.455-470.
- (4) Haidt, J., The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review*, 108(4), 2001. pp.814-834.

- (5) 高井弘弥 「道徳判断における直感システムと推論システムの関連」 『武庫川女子大学大学院教育学研究論集』, 5, 2010. pp.27-32.
- (6) 寺井朋子 「Haidt の道徳的直観者モデルについての一考察—モデルが道徳性研究に与える影響とこれからの道徳性研究の方向性—」 『モラロジー研究』, 63, 2009. pp.109-124.
- (7) Cushman, F. Y., The role of conscious reasoning and intuition in moral judgment. *Psychological Science*, 17(12), 2006. pp.1082-1089.
- (8) Cathcart, T., *The trolley problem, or would you throw the fat guy off the bridge? A philosophical conundrum*. Workman Publishing Company. 2013.
- (9) Edmonds, D., *Would You Kill the Fat Man?: The trolley problem and what your answer tells us about right and wrong*. Princeton University Press. 2013.
- (10) サンデル, マイケル. 『これからの「正義」の話しよう』. 鬼澤忍, 訳 東京: 早川書房. 2010.
- (11) Yamagishi Toshio, Li, Yang, Takagishi, Haruto, Matsumoto, Yoshie, & Kiyonari, Toko, In search of Homo economicus. *Psychological Science*, 25(9), 2014. pp.1699-1711.
- (12) Bonnefon, Jean-François, Shariff, Azim, and Rahwan, Iyad, The social dilemma of autonomous vehicles. *Science* 352 (6293), 2016. pp. 1573-1576.
- (13) Navarrete, D., McDonald, M. M., Mott, M. L. and Asher, B.C., Virtual morality: Emotion and action in a simulated three-dimensional "Trolley Problem". *Emotion*, 12(2), 2012. pp. 364-370.
- (14) Hoffman, M. L., The development of empathy. In J. P. Rushton (Ed), *Altruism and helping behavior*, Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum. 1981. pp. 41-63.
- (15) 本間優子・内山伊知郎 「役割(視点)取得能力に関する研究のレビュー—道徳性発達理論と多次元共感理論からの検討—」 『新潟青陵学会誌』, 6(1), 2013. pp. 97-105.
- (16) Davis, M. H., Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 1983. pp. 113-126.
- (17) Selman, R., Social-cognitive understanding. In Lickona, T. (Ed.), *Moral development and behavior*, New York: Halt. 1976. pp.299-316.
- (18) Davis, M. H., A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 1980. p.85.
- (19) Shelton, C., & McAdams, D., In search of an everyday morality: *The Development of a Measure. Adolescence*. 25(100), 1990. pp. 923-943.
- (20) Walker, L. J., Gus in the gap: Bridging the judgment-action gap in moral functioning. In D. K. Lapsley & D. Narvaez (Eds.), *Moral development, self, and identity*. Mahwah, NJ: Erlbaum. 2004. pp. 1- 20.
- (21) Aquino, K. F. & Reed, A., II., The self-importance of moral identity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83(6), 2002. pp. 1423-1440.
- (22) Hardy, S. A., Walker, L.J., Olsen, J. A., Woodbury, R. D. & Hickman, J. R., Moral identity as moral ideal self: Links to adolescent outcomes. *Developmental Psychology*, 50(1), 2014. pp. 45-57.
- (23) Reed, A., II, & Aquino, K. F., Moral identity and the expanding circle of moral regard toward outgroups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84(6), 2003. pp. 1270-1286.
- (24) Hauser. M. D., Cushman. E., Young. L., Kang-Xing J.R., & Mikhail J., A dissociation between moral judgments and justifications. *Mind & Language*, 22(1), 2007. pp. 1-21.
- (25) 寺井朋子 「ルールが明確ではない非道徳的行動の分類とその抑制要因」 『日本応用教育心理学研究』, 25(2), 2009. pp. 3-11.
- (26) 加藤隆勝・高木秀明 「青年期における情緒的共感性の特質」 『筑波大学心理学研究』, 2, 1980. pp. 33-42.
- (27) Greene, J. D., Sommerville, R. B., Nystrom, L. E., Darley, J.M., & Cohen, J.D., An fMRI investigation of emotional engagement in moral judgment. *Science*, 293, 2001. pp. 2105-2108.
- (28) Atkins, R., Hart, D., & Donnelly, T., Moral identity development and school attachment. In Lapsley, D. K., & Narvaez, D. (Eds.), *Moral development, self, and identity*. US: Lawrence Erlbaum Associates Publishers. 2004. pp.65-82.
- (29) Aquino, K., McFerran, B., & Laven, M., Moral identity and the experience of moral elevation in response to acts of uncommon goodness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 100(4), 2011. pp. 703-718.
- (30) Lapsley, D., & Stey, P. L., Moral self-identity as the aim of education. In L. Nucci, D. Narvaez, and T. Krettenauer. (Eds.). *Handbook of Moral and Character Education, 2nd Edition*. New York: Routledge. 2014. pp.84-100.

- (31) Kochanska G., Mutually responsive orientation between mothers and their young children: A context for the early development of conscience. *Current Directions in Psychological Science*, 11, 2002. pp. 191-195.
- (32) Kochanska, G., Koenig, J.L., Barry, R.A., Kim, S., & Yoon, J. E., Children's Conscience During Toddler and Preschool Years, Moral Self, and a Competent, Adaptive Developmental Trajectory. *Developmental Psychology*, 46(5), 2010. pp. 1320-1332
- (33) Colby, A. & Damon, W., *Some do care: Contemporary lives of moral commitment*. New York: Free Press. 1992.
- (34) Hart, D., The development of moral identity. *Nebraska Symposium on Motivation*, 51, 2005. pp. 165-196.
- (35) Lapsley, D.K. & Narvaez, D., A social-cognitive approach to the moral personality. In D. K. Lapsley & D. Narvaez (Eds.), *Moral development, self and identity*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 2004. pp. 189-212.
- (36) Côté, S., Piff, P. K., & Willer, R., For whom do the ends justify the means? Social class and utilitarian moral judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 104, 2012. pp. 490-503.
- (37) Koenigs, M., Young, L., Adolphs, R., Tranel, D., Cushman, F., Hauser, M., & Damasio, A., Damage to the prefrontal cortex increases utilitarian moral judgments. *Nature*, 446, 2007. pp. 908-911.
- (38) Mendez, M. F., Anderson, E., & Shapira, J. S., An investigation of moral judgment in frontotemporal dementia. *Cognitive and Behavioral Neurology*, 18(4), 2005. pp. 193-197.
- (39) Sauer, H., Educated intuitions. Automaticity and rationality in moral judgement. *Philosophical Explorations*, 15(3), 2012. pp. 255-275.
- (40) Rudman, L.A., Ashmore, R.D., and Gary, M.L., 'Unlearning' automatic biases: The malleability of implicit prejudice and stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81(5), 2001. pp. 856-868.
- (41) Levy, N., *Neuroethics: Challenges for the 21st century*. Cambridge: Cambridge University Press. 2007.